

日本小児看護学会における健やか親子21推進事業の 評価と今後の課題(第2報) — 学会に期待する取り組みについて —

勝田仁美、奈良間美保、松森直美、二宮啓子、内正子、辻佐恵子
(健やか親子21推進事業委員会)



目的 学会員のニーズに合った学会活動を行うため、本学会に期待する取り組みを明らかにする。

方法 対象者: 日本小児看護学会正会員1450名
調査方法: 無記名自記式質問紙調査
今後の取り組みとして期待する内容について具体例23項目から上位3つ選択してもらい、その理由を6種より選択してもらうとともに具体的内容を自由記述で求めた。
倫理的配慮: 調査の趣旨、協力への自由意思、学術集会等での公表を説明書に明記し、返信により同意があったものとした。
調査期間: 2012年11月～2013年1月

結果 回収270部(18.6%)

最も多かった項目は、「訪問看護の充実」で、これは上位3つを合算して分析を行った結果も同様であった。以下、合算した結果を上位より順に表1に示し、表2に選択した理由をあげた。「訪問看護の充実」と「入院から在宅への移行期の支援」は、社会の要請・ニーズが強いという理由が約半数を占めており、「子どもの虐待に関する支援」では社会で問題が生じているからという理由が多かった。上位6位までの具体的内容を表3に示した。

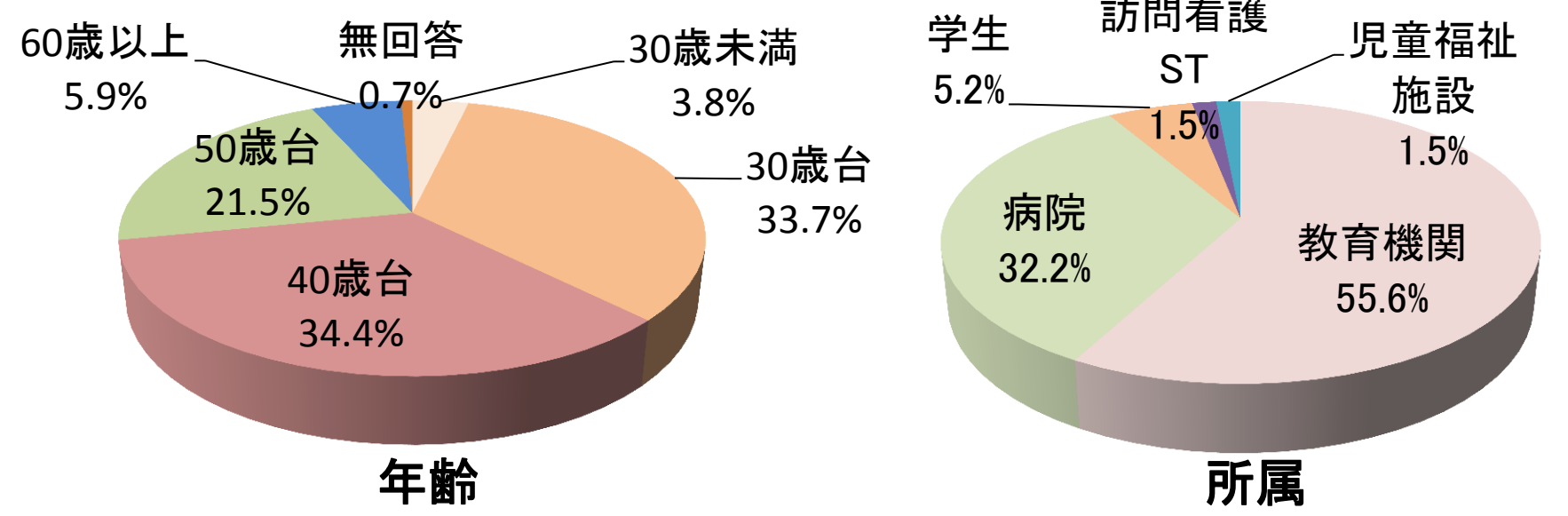


表1 学会に期待する取り組み順位 <所属別順位>

順位	人数	取り組み	病院順位(人)	教員順位(人)
1	84	訪問看護の充実	4	17
2	71	入院から在宅への移行期の支援	1	31
3	65	子どもの虐待に関する支援	3	21
4	59	外来看護の充実	4	17
5	56	診療報酬に向けた小児看護技術に関するエビデンスとなる研究活動	2	24
6	45	発達障害のある子どもと家族への支援	9	10
7	39	小児看護教育(継続教育含む)	11	9
8	37	看護師の適正配置	6	15
9	32	子どもの入院に伴う家族への支援	9	10
	32	小児救急医療の整備と充実	14	6
11	29	特別支援学校の看護師への支援	14	6
12	26	プレパレーションの普及	7	12
13	25	子どものメンタルヘルス	12	8
14	24	混合病棟化にまつわる問題	14	6
15	23	治療選択における子ども・家族への支援	7	12
	23	小児看護研究の充実	14	6
17	18	小児の臓器移植に関する問題	13	7
	18	小児看護の災害看護	14	6
19	13	NICU看護の充実	19	3
20	12	小児看護の国際交流	21	1
21	8	その他	19	3
22	4	セクシャルマイノリティへの支援	21	1
	4	病院内の事故防止の充実	23	0

表2 上位5項目の選択理由別人数

選択理由	①看護師として貢献できる取組と考えたから	②看護の知識が十分でないところを強化したいから	③看護師が支援できていないから	④社会の要請・ニーズが強いから	⑤社会で問題が生じているから	⑥その他(複数回答含む)
1位 訪問看護の充実	17	16	4	17	11	
2位 入院から在宅への移行期の支援	10	6	4	6	5	
3位 子どもの虐待に関する支援	3	13	4	7	7	
4位 外来看護の充実	7	14	19	29	47	
5位 診療報酬に向けた研究活動	3	3	29	5	10	
	16	7	5	4	4	

病院看護師と教員では(表1)、期待することに違いがあり、1～5位で共通しているのは「入院から在宅への移行期の支援」「子どもの虐待に関する支援」「外来看護の充実」「訪問看護の充実」であった。病院では「診療報酬に向けた小児看護技術に関するエビデンスとなる研究活動」「看護師の適正配置」「プレパレーション」「治療選択における子ども・家族への支援」も上位にあり、教員では「発達障害のある子どもと家族への支援」「小児看護教育」「小児救急医療の整備と充実」「特別支援学校の看護師への支援」の優先順が病院看護師より高かった。

本学会に希望する活動の自由記述を表4に示した。<学習・研修の機会を><学会の社会化に向けた活動><会員への広報の必要性><学会のスタンスへの意見><具体的課題の提案>などが挙がっていた。

表4 本学会に希望する活動についての自由記述

事項	具体的記述内容
学習・研修の機会を	・学会主催での研修会、事例検討会の開催があるとよい(2件) ・小児救急看護についてのセッション(認定の方以外も含んだもの) ・NICU退院調整コーディネーターの育成など ・医療的ケアがある児の支援について ・重症心身障害児のQOLを考えたりリハビリテーションなどについてもマニュアル等があれば実践に活用したい ・会員の教育(セミナーなども含む)機会の展開、研究支援システムなど 例 救急看護学会のようなラダーを用いた研修の展開など 会員が入会しなくなるような活動は必要だと思います。
学会の社会化を	・本当は、とても大切でもっと重要視されてもいいはずの小児看護が弱体化しているような気がする。団体としての人数は少ないかも知れないが、子どもとその家族を守り、育むために、どんだん声をあげてほしいと思う。 ・看護の各学会の横の連携の強化や、他分野の人たちへの広報活動を社会にアピールする必要がある。(2件) ・少子化時代において、小児看護の重要性と特殊性、高度な技術と観察力と判断力が必要とする分野であることをアピールし、小児看護CNSの地位確立とともに診療報酬に向けて活動してほしい ・子どもの状況を考えると、医療機関の小児看護からもっと広げていくことが必要と思います。地域で専門的に小児看護のできる人材と活動の場を作っていくしてほしい。 ・学会に入っていたら活動することも大切ですが、関連領域、職種の人とさらに交流しながらの看護の検討が必要なので、そのようなことが可能な学会活動ができるとよいと思います。小児看護を牽引する唯一の学会なので期待は大きいです。 ・子ども虐待防止学会とのタイアップ企画 ・小児看護は学生にも常に人気があり、やりたい看護師も沢山いるのに、働きやすい、あるいは働き続ける環境が整っていない。もっと社会に認めてもらえるように頑張らなといけなと思う。 ・成人のがんなどは緩和ケアチームの中でもDrはNsの存在を意識しているが(学会の中でも)小児Drの意識は低いと思うため、個々でDrに伝えるより、学会でも伝えると違うと思ったため。
広報の必要性	・社会、各病院等医療機関への活動内容の周知、広報を強化(5件) ・学会で作成したガイドライン等は会員に全て配布してほしい ・ケアマニュアルのように、活動成果から生まれた文献・ツールをもっとオープンに扱ってほしい(各現場で活用しやすいように)
学会のスタンスへの意見	・とても大きな学会として成長していることを誇りに思っております。 ・この学会は看護協会主催の学会と違い"発信"している、日本の子どもの未来を任っていると感ぜられるもので、何も出来ないながらも所属していることに誇りが持てます。パイオニアの方々、会員の皆様ありがとうございます。頑張りましょう! ・もっと、子ども、家族のことが語られる学会であって下さい。もっと"看護"を語る場となるようとりくみをして下さい。 ・臨床、教育、研究のそれぞれがもっと近付ければいいな、と思う。CNSとCNも、共にできることがあれば広がりがもてる気がする。 ・看護師や看護教員がもっと身近に感じ利用できる場を今後も作っていく必要があると思います。 ・臨床の人が参加しやすい学会であってほしい 小児にまつわる問題にいち早く気付き、とり上げてほしい ・地域における小児看護の提供について活動を広げていけるとよいと思います。 ・小児の権利の擁護について法的な介入も学会として必要ではないか? ・査読基準を明確にし、原著論文を査読者の力量高め増やしていただきたい。自らの首をしめているようにも感じております。 ・いろいろなことにチャレンジできていると思います。今の形でよい。
具体的課題	・虐待に関する支援として、里親養育の支援もとりあげていけるとよいと考えます。 ・保育所勤務看護師への支援・教育助成 3才未満からの入園希望が増え待機児童が一向に減らない社会の要請を受け保育の中の看護の役割を体系化していきたい。 ・小児看護の国際交流や小児看護研究の充実をはかる企画を希望します。 ・多くの学会が年100mSVを許容する声明を発表していますが、小児看護学会としてはどのような問題意識を持ちどのような取り組みをしようとしているのか方向性をお示し下さると良いと思います ・クリニック等に勤務する看護師の入会を促す活動、特別支援学校・学級・保育園に勤務する看護師の支援活動は、特別支援学校・学級・保育園→看護の活躍の場の拡大につながり、今後益々、必要性が高まると考えられる。 ・小児の訪問看護師の支援活動について。多くの訪問看護ステーションは、小児看護の経験がないという理由から、小児を受け入れるのが難しいと言われます。しかし、訪問する子どもは1人1人が今まで経験した以上に個別なケースが多いので、経験のあるなしに関わらず看護師自身を支え学び合える活動があるといいなと思います。
その他	・全て大切な活動に思えました。3つ選ぶことや優先度を定めることはむずかしい。 ・具体的に支援できるものがあれば参加したいと思います。

表3 本学会での取り組みとして期待する第1位～第6位の内容の理由(具体的内容)

第1位 訪問看護の充実	件数
小児在宅支援の意義と強化	10
小児在宅ケアの支援体制の整備の希望	9
小児に対応する訪問看護ステーションの不足と拡大の必要性	8
小児の訪問看護の充実の希望	7
社会的ニーズの高さと現実のギャップの問題視	4
重症児等への支援の充実の必要性	4
訪問看護師育成の必要性	4
受け入れ施設拡大への希望	3
地域格差の是正	3
在宅医療の対象となる子どもの増加	2
子どもと家族を支えるための連携への期待	2
第2位 入院から在宅への移行期の支援	件数
在院日数短縮に伴う在宅移行支援の充実の必要性	9
在宅への移行が困難な子どもと家族の支援の充実	8
院内外の連携や社会資源の知識の必要性と不足	6
子どもと家族のための看護の本質	4
支援の明確化によるスムーズな退院支援	4
小児訪問看護の拡充	3
サービス・支援体制の充実	3
対象となる小児の増加	3
第3位 子どもの虐待に関する支援	件数
専門的支援の体系化と充実が必要	12
予防方法を考える必要がある	8
病院での支援・対応を考える	4
早期発見と対応が必要	4
家族(母親)への支援が急務	3
保育所への看護師配置が必要	1
地域社会全体での取り組みが必要	1
親(母性、父性)を育む事が必要	1
被虐待児のフォローアップが必要	1
診療報酬に結びつける	1
必要性を実感	1
学会としての取り組みの明確化が必要	1
第4位 外来看護の充実	件数
入院期間短縮に伴う外来看護の充実の必要性	13
子どもや家族の生活を支える育児支援の充実の必要性	8
看護師の配置等を背景に多様なニーズに応え切れない現状	7
小児看護の専門性や診療報酬との結びつきによる発展への期待	5
在宅支援を担う外来看護の役割の充実	2
看護師自身のやりがいや自己研鑽	2
子どもが少ない地域でのクリニックでの看護の充実	1
第5位 診療報酬に向けた小児看護技術に関するエビデンスとなる研究活動	件数
診療報酬化の促進による発展や社会的認知の向上	15
小児看護の人員の充実	6
小児看護の技術の一貫性、明確化が必要	6
様々な有資格者の活躍の場がほしい	3
看護技術の検証	2
お金が動く現場が動くので	2
個人ではどうにもならない	2
訪問看護の充実の前段階としてのエビデンスづくり	2
学会のデータベースづくりが必要	1
第6位 発達障害のある子どもと家族への支援	件数
発達障害児への対応・支援の充実	10
入院や普通学級に発達障害児が増えており、社会的ニーズが高い	5
発達障害児の家族への対応・支援の充実	4
看護師の知識、援助方法の充実	4
病棟のニーズが高い	2
社会的な誤解を解く必要がある	2

考察 医療の中心が病院から在宅に急速にシフトする中で、早急な対応が求められている現状にこたえようとする会員の姿勢が窺えた。また、他職種や社会に広く学会の活動を伝え、貢献することを望む声も聞かれた。今後「学会」として、具体的活動に向け、少数意見も含め会員間でのより活発な議論が期待される。

* 本調査結果について、学会ホームページに掲載する予定です。 ご協力ありがとうございました。